『フランス文学語学研究』執筆ガイドライン試案

01.9.8作成

片山　幹生

■はじめに

この文書は,『フランス文学語学研究』の標準的な書式についてのガイドラインです．ここで示された書式での記述を執筆者に強制するものではありませんが，執筆の際の参考にして頂ければ幸いです．特に執筆者からの指示がない場合，同誌はこのガイドラインに沿った書式で組版されます.

このガイドライン作成にあたっては，日本フランス語フランス文学会「学会誌執筆要項」，青山学院大学文学部フランス文学専攻で配布されている「卒業論文――執筆要項と注意事項（2000年度改訂版），鈴木兼吉編『欧文表記ハンドブック』（日本エディタースクール、1983年）を主に参考にしました.

１．本文中の作品名・雑誌名等の扱い方

独立して出版されている日本語の著作はそのタイトルを『　』の中に記す．欧文の著作物（書籍，新聞，雑誌等）のタイトルはイタリック体で記す．題名に冠詞が含まれている場合は，冠詞も大文字とし，イタリック体にする.

例：*La Quotidienne*　　*La Comédie humaine*　　*Cinq Grandes Odes*

２．本文中の論文名・詩・章名の扱い方

雑誌掲載の論文，詩集に収められた詩は，日本語の場合は「　」に入れる．フランス語の場合は，半角ギュメ «　» の中に記す．半角ギュメの前後は半角スペースを入れる．原題が大文字もしくは小文字のみで書かれている場合は１．の規定で書き分けるが、それ以外の場合は原題のままでよい.

例：　『悪の華』収録の「小さな老婆たち」

« Le Petites Vieilles » dans *Les Fleurs du Mal*

３．引用文

a. 本文中に改行せずに作品もしくは文献からの比較的短い引用を挿入する時は, 日本語の場合「　」内にしるす. 欧文の短い引用は, 半角ギュメ«　　»（ギュメの前後は半角アキ）の中に記入する.

例：ヴィヨンは当時の学生の堕落した生活もしくは自分のそうした生活を犬儒者の口調をもって「すべて酒場と女へなり」« Tout aux tavernes et aux filles [11] » と歌っているのである.

b. 改行を必要とする引用は，引用文全行の冒頭を全角二文字分下げて書く. この場合,「　」ないし«　　» は不要.

c. 引用文の一部を省略したり，説明を書き加える場合は［　］（欧文の場合は半角）を用いる.

例：引用文の一部を途中で執筆者側で省略する場合　　[...]

代名詞の説明の場合，欧文では原則としてイコールを入れる　　il [=Appolinaire]

所有格の場合は次のようにする　　ses amis [=d'Appolinaire]

間接代名詞の場合はイコール不要　　Picasso lui a dit [=à Appolinaire]

和文では常にイコール不要　　彼［アポリネール］

d. 本文中で特定の語句を強調する時は，その語句に一重下線をひく（日本語の本文を強調したい時はその箇所に傍点をふってもよい）．引用文中の筆者の判断で強調した語句がある場合は,（下線筆者）あるいは（傍点筆者）と入れる.

例:「<u>すべての感覚</u>を錯乱させること」« le dérèglement de tous les sens [16] »（下線筆者）とランボーが述べるとき，この「すべての感覚」のうちには…

e. 引用文は原文に忠実でなければならないので，文中に誤りがあってもそのままとする．ただし、引用者が指摘または訂正するときは，ブラケット [　]

を用い，以下のいずれかの用い方をする．

i. 誤りの後に[*sic*] （欧文の場合）もしくは［ママ］（和文の場合）と記す．

ii. ブラケット[　] 内に，引用者による訂正を書き込む．

例：A.D.1596 [1595]

４．注の書式

a. 注は後注形式で，全角一字下げてはじめる．組版では注のフォントは，本文より小さなものを用いる．本文中では右肩に通し番号を打つ．番号の位置は，日本語の句読点および欧文のポワンとヴィルギュルの場合はその前に，ポワンヴィルギュル，ドゥポワン，疑問符，感嘆符の場合はその後ろに置く．括弧類・ギュメの場合は，引用原文にそれがある場合はその外，本文中の短い引用の場合は括弧類・ギュメの内側に番号を置く．

例：三つのグループに分けられる(1).

Division de l’un et Confusion des deux(2).

Tout compte fait ils s’ennuyaient ; (3)

Est-ce que les oiseaux se cachent pour mourir ?(4)

« Tu as vu Henri ? (5) »

b. 作品や引用文などの参照は，初出の場合は次の順序で行う．

i. 作品の場合：

・著者名（著者が二名の場合は，etを用いて両名表記，三名以上の場合は代表著者一名のみを記して，残りの著者名は *et al.* として省略するのが普通）

・書名（欧文はイタリック，和文は『　』内に．ある書籍の中の一作品を示す場合は，書名の前に，欧文は作品タイトルを半角ギュメ«　» 内に，和文は「　」内に記す）．

・編者名（いる場合のみ．版の編者ならéd. parを，全体の監修者なら sous la dir. de.　を用いるのが普通）．

・刊行地名（日本語の場合，省略されることが多い）．

・出版社名

・叢書名（半角ギュメ«　»で括ることが多い．前にcollectionの略であるcoll.を付す場合もある）.
・刊行年
・ページ（一ページのみならp.45といった具合に，複数ページの時はpp.45-49のように記す）.

例：
松原秀治『フランス語の冠詞』，白水社，1978，p.154.
Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Paris, Gallimard, 1935, p.292-301.
Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, Paris, Gallimrd, coll. « Folio », p.108.
Denis, Crouzet, *Les guerriers de Dieu. La violence au temps des troubles de religion (vers 1525-vers 1610)*, t.1, Seysel, Champ Vallon, 1990, pp.109-110.

ii. 定期刊行物，論文集中の論文の場合
・執筆者名
・論文名（欧文のときは«　»，和文のときは「　」で括る）
・雑誌名（欧文のときはイタリック，和文のときは『　』で括る． inは雑誌等複数著者の場合，dansは単独著者の場合に用いる．
・巻号
・刊行年
・ページ

例：
片山幹生「中世演劇における台詞の機能」，『フランス文学語学研究』，第十九号，2000，pp.15-58.
E. Faral, « *Le Roman de la Rose* et la pensée française au XIIIe siècle », in *Revue des Deux Mondes*, t.XXXV, 1926, p.459.

c. 作品参照，論文参照ともに，同一論文に二度目以上の参照されている場合，以下のような略号を注表記で用いるのが通例.
・*Ibid.* (=*lat.* Ibidem) 直前の注で引いたのと同じ文献を示す時.

例：

(25) Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, Paris, Gallimard, coll. « Folio », p.108.

(26) *Ibid.*, p.112.

・*op. cit.* (=*lat.* opera citato) 「前掲書」に．一度，注に揚げた著作に，いくつかの注を隔てた後，再び言及する場合に用いる．著者名を記した後に用いる．もし同一著者による文献を既に二つ以上引いている場合には，著者名に加えて，タイトル（長い場合は略してもよい）を記した後に，用いる．
・Id. (=*lat.* Idem) 通例，同一著者の別々の著書から連続して引用する場合に，著者名を略するときに用いる．

例：

(15) Mikio Katayama, « Amour fou dans le théâtre français au XIIIe siècle », in *Revue de civilisation médiévale*, t.125, 2002, pp.12-19.

(16) Id., *La Musique française au moyen âge*, Tokyo, Hakueisha, 2002, pp .56-58.

５．その他

a. 文綴と禁則

文綴については，多くのワープロソフトは両揃え機能や，欧文と和文を自動調節を持っているのでそれを利用して原稿を作成すればよい. ハイフネーション等の処理は原稿執筆時には必要ない．禁則についても同様であり，禁則処理が自動的に正しくなされない場合も（字間が不自然に空いてしまうなど），執筆者自身が原稿執筆時にそれらを修正するには及ばない.

こうした文綴，禁則などの処理は，原則として版が組み上がった後の校正段階において，赤字で指示すること．文綴についての最終的判断は，フランス語文綴ルール，組版上の慣例を考慮の上，編集委員と印刷所の話し合いに基づいて行われる．

b. 約物（括弧類，句読点）の処理

・ 『フランス文学語学研究』の組版においては，約物（括弧類や句読点）は以下のような処理をすることを原則とする。執筆者は、原稿作成段階

で留意した上で執筆すること。

- 括弧類，句読点については，和文文中では日本語のもの（全角）を，欧文注では欧文の半角のものを用いる．
- 欧文の引用符としては、英語式のダブルコーテション”　”ではなく、フランス語式の半角ギュメ«　»を用いることを原則とする。半角ギュメ内側前後には、半角スペースを入れる。
  - ✧　例：×«amour»　　〇« amour »
- 欧文中において、ドゥポワン（ ： ）　、ポワンヴィルギュル（ ; ）、感嘆符（ ! ）、疑問符（ ? ）の前後は、べた組みとはせず、半角スペースを入れる。
- 欧文中において、パーレーン(　)、ブラケット[　]の内側はベタ組み。
  - ✧　例：×(amour)　　〇(amour)
- 欧文中において、ダッシュ（—）は全角の長さのものを用い、前後に半角のスペースを挿入する。全角ダッシュがフォントに含まれていない場合は、ハイフン記号（-）を二つ並べることで代用し、校正字に全角ダッシュに修正するよう指示する（あるいは編集委員の判断で修正する）。

c. 付録：論文でよく使われる略号一覧

anon.	anonymous 作者不詳の
c., ca.	circa およそ。ca.1400 1400年頃。
cf.	confer 比較せよ、参照せよ。
et al.	et aliii 及びその他。複数の著者を示す時など。
et seq., et sqq.	et sequentes (sequentia) 以下。p.5 et seqq. 第５ページ以下に。
fac., facsim.	facsimile 複製版。
ibid.	ibidem 同じ箇所に、同書に（注などで同一著者の同一著作に連続して言及する場合などに用いる）。
id.	idem 同著者、同語、同書等。（同一著者の別々の著作から連続して引用する場合に、著者名を略するのに用いる）。
introd.	introduction 序文。
ms., mss.	manuscrit(s) 手写本。
op. cit.	opere citato 前掲書に（一度注で挙げた著作を、いくつかの注を

	隔てた後に、再び言及する場合に用いる。著者名とページ数は必ず記す)。
passim	passim 引用文中のいたるところに。cf. pp.25, et *passim* 25ページ他至る箇所を参照せよ。
sic	sic 原文のまま。
s.d.	sans date 日付なし。
t., tom.	tome 巻、冊。
voir	voir を見よ。